

佳作

テーマ：医療と福祉、わたしの体験 「善意か悪意か」

東京都・白百合学園高等学校2年 岩谷 歩実

国内海外を問わず、さまざまな場所で子供達から寄付を求められた時、皆さんはどうしているのだろうか。私は必ず協力している。お金がほとんどないときも気持ちだけ、と言って寄付をしていた。困っていたら助ける、これが我が家の約束だ。お金に余裕はないけれど、手を差し伸べることは、間違いない助けになると思っていた。

そんな私は、夏休みを利用してカンボジアの小学生に運動を教える活動に参加した。

カンボジアはクメール・ルージュによって行われた共産化と大量惨殺の暗い歴史により、年を重ねた教育者がほとんどいない。特に音楽や体育などの教科を教えられる人はほほいさないそうだ。例えば運動に関しては、体育の授業がない。そのため運動の仕方が分からず、運動神経は良いのに運動すると大げがをするらしいのである。

私はその助っ人として、体育の集団活動を教えてきた。集団活動、すなわち運動会の騎馬戦やム力テ競争などを教えてきたのである。

子供達は私の年齢の人と一緒に遊んだり、勉強したことがないようだった。それはこの年になれば大人と同様の立派な働き手であり、学校に行くより働く、という選択しかないのである。この活動を通じて、カンボジアの子供達が学びの楽しさを感じ、学校で楽しい時間を過ごしてくれたら、と充実した活動ができたと感じた。

しかしその活動中のある日、私は生まれて初めて他人から強く注意され、動揺した。それは歴史を学ぶために史跡を見学している最中の出来事であった。

路上で小さい子が可愛い小さい手を出す姿に、思わず財布に手が伸びた。その時、

「やめっ」

という声があった。振り返ると今回のガイドのキムさんだった。

「え、なに？ これっていけないことなの？ 私の寄付で水汲みする日が減って、学校に行けるでしょう」

こう思った。食べるためには働かなくてはならない。だから学校に行けない。少しだけこれで働く代わりに学校に行ける日が出るはずだ。なんで人助けをしている私が皆の前で叱られなくてはならないのか。

人前で注意された恥ずかしさと動揺で、泣きそうになっている私に、キムさんは続けた。

「アユミ、それは大変いいことだと思う。ただ、考えてみて。一日中ずっと働き続けてもらうお金と、手を出して一瞬で手に入れることができるお金が同じ金額だったらどうなる？ 手を出せばお金がもらえることを覚えた子供達はこの先どうなると思う？」

私ははっとした。手を出せばお金が入ることを知った子供達は、きつとも簡単にお金が手に入ることを覚え働かなくなるのだろうか。

でもこの出来事があったことで、私の意識が変わった。私は寄付をすることだけでカンボジアの皆が豊かになると考えていた。しかし、その場だけの貢献ではなく、大切なのはこれから生きていくための、未来への貢献なのだ。そして現地に足を運び現状を知り、何が必要なのか、何があれば豊かな将来が切り開けるのか、その観点から協力することが大切なのである。

例えば時間はかかるが教員を育成することで、将来国を背負って立つ人を育てることに結びつくのだ。

10日間ほどであったが、高校生の私の意識を変えてくれたこと、考える機会を与えてくれたこと、そして本当に大切なのは、その場の協力ではなく、将来の糧になることだとカンボジアは教えてくれた。

帰国後、私は日本の絵本を現地の言葉にして送るボランティアを始めた。選んだ本は「せかいいちつくしいばくの村」という本である。数年後、この本を読んだ子供達が自国の発展のために貢献してくれることを祈って、私は小さな種をまいた。